

I

(1) 2月の降水量の平均値は以下の通りである。

$$A \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(30+20+10)\} = 20,$$

$$B \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(90+100+110)\} = 100,$$

$$C \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(80+100+120)\} = 100,$$

$$D \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(30+50+70)\} = 50.$$

よって、偏差の値(降水量を x , 平均値を \bar{x} としたときの $x - \bar{x}$ の値)は、次表のようになる。

	A 地点	B 地点	C 地点	D 地点
2019 年	10	-10	20	-20
2020 年	10	0	0	0
2021 年	0	10	-20	20
2022 年	0	10	20	-20
2023 年	-10	0	0	0
2024 年	-10	-10	-20	20

(1) 2月の降水量の分散(標準偏差の2乗)は以下の通りである。

$$A \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(10^2+0^2+(-10)^2)\} = \frac{200}{3},$$

$$B \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(10^2+0^2+(-10)^2)\} = \frac{200}{3},$$

$$C \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(20^2+0^2+(-20)^2)\} = \frac{800}{3},$$

$$D \text{ 地点 } \frac{1}{6}\{2(20^2+0^2+(-20)^2)\} = \frac{800}{3}.$$

よって、標準偏差が最も大きいのは ア C 地点と イ D 地点 (ア と イ は順不同) であり、その値は $\sqrt{\frac{800}{3}} = \frac{20\sqrt{6}}{3}$ である。これは最も小さい地点の標準偏差 $\sqrt{\frac{200}{3}} = \frac{10\sqrt{6}}{3}$ の エ 2 倍である。

(2) 標準偏差を平均値で割った値は、

$$A \text{ 地点 } \frac{\sqrt{6}}{6}, \quad B \text{ 地点 } \frac{\sqrt{6}}{30},$$

$$C \text{ 地点 } \frac{\sqrt{6}}{15}, \quad D \text{ 地点 } \frac{2\sqrt{6}}{15}.$$

これが最も大きいのは オ A 地点、最も小さいのは カ B 地点である。

(3) A, B, C の各地点と D 地点の降水量の偏差の積とその合計は次表の通り。

	A と D	B と D	C と D
2019 年	-200	200	-400
2020 年	0	0	0
2021 年	0	200	-400
2022 年	0	-200	-400
2023 年	0	0	0
2024 年	-200	-200	-400
計	-400	0	-1600

よって、相関係数の値は

$$A \text{ と } D \text{ の間 } \frac{\frac{-400}{6}}{\sqrt{\frac{200}{3}}\sqrt{\frac{800}{3}}} = -0.5,$$

$$B \text{ と } D \text{ の間 } \frac{\frac{0}{6}}{\sqrt{\frac{200}{3}}\sqrt{\frac{800}{3}}} = 0,$$

$$C \text{ と } D \text{ の間 } \frac{\frac{-1600}{6}}{\sqrt{\frac{800}{3}}\sqrt{\frac{800}{3}}} = -1.$$

したがって、D 地点との間に最も強い負の相関関係が見られるのは キ C 地点であり、相関関係が見られないのは ク B 地点である。

(4) 「正確な値」への修正により、降水量の変化は 2019 年が +4 mm, 2022 年が -4 mm であるが、降水量の総和は $(+4) + (-4) = 0$ より変化しない。したがって、平均値は再計算する前 ケ ③ と一致する。

一方、降水量の偏差は 2019 年が -10 mm から -6 mm へ、2022 年が +10 mm から +6 mm へ変化するため、偏差の2乗は再計算する前より小さくなる。よって、標準偏差は再計算する前 コ ① よりも減少する。

[2] (1) $a = 3$ のとき,

$$f(x) = 3^x + 3^{-x}, \quad g(x) = 3^x - 3^{-x}$$

であるから,

$$\begin{aligned} f(2) + g(-2) &= (3^2 + 3^{-2}) + (3^{-2} - 3^2) \\ &= \boxed{\frac{2}{9}}, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} f\left(\frac{1}{2}\right)g\left(-\frac{1}{2}\right) &= (3^{\frac{1}{2}} + 3^{-\frac{1}{2}})(3^{-\frac{1}{2}} - 3^{\frac{1}{2}}) \\ &= (3^{-\frac{1}{2}})^2 - (3^{\frac{1}{2}})^2 \\ &= 3^{-1} - 3^1 \\ &= \boxed{-\frac{8}{3}}, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \{f(x)\}^2 - \{g(x)\}^2 &= \{f(x) + g(x)\}\{f(x) - g(x)\} \\ &= (2 \cdot 3^x) \cdot (2 \cdot 3^{-x}) \\ &= \boxed{4}. \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (2) \quad f(p)f(q) &= (a^p + a^{-p})(a^q + a^{-q}) \\ &= a^{p+q} + a^{p-q} + a^{-p+q} + a^{-p-q} \\ &= a^{p+q} + a^{-(p+q)} + a^{p-q} + a^{-(p-q)} \\ &= f(p+q) + f(p-q), \\ g(p)g(q) &= (a^p - a^{-p})(a^q - a^{-q}) \\ &= a^{p+q} - a^{p-q} - a^{-p+q} + a^{-p-q} \\ &= a^{p+q} + a^{-(p+q)} - a^{p-q} - a^{-(p-q)} \\ &= f(p+q) - f(p-q) \end{aligned}$$

であるから, $f(p)f(q) = 12$, $g(p)g(q) = -8$ のとき,

$$f(p+q) + f(p-q) = 12, \quad f(p+q) - f(p-q) = -8.$$

$$f(p+q) = \boxed{2}, \quad f(p-q) = \boxed{10}.$$

したがって, $r = p+q$, $s = p-q$ とおくと,

$$a^r + a^{-r} = 2, \quad a^s + a^{-s} = 10.$$

$$(a^r)^2 - 2a^r + 1 = 0, \quad (a^s)^2 - 10a^s + 1 = 0.$$

$$(a^r - 1)^2 = 0, \quad (a^s - 5)^2 = 24.$$

よって, $a^r = 1$ であるから $p+q = r = \boxed{0}$.

また, $p > q$, $a > 1$ のとき $a^{p-q} > 1$ より,

$$a^{p-q} = a^s = 5 + 2\sqrt{6}.$$

$p+q = 0$ より $a^{p-q} = a^{2p}$ に注意すると,

$$a^p = \sqrt{5 + 2\sqrt{6}} = \boxed{\sqrt{3} + \sqrt{2}}.$$

[3] (1) $x \geq 0$ のときは, (a), (b), (c) いずれも

$$y = x(x-2) \text{ すなわち } y = (x-1)^2 - 1.$$

$x \leq 0$ のときは,

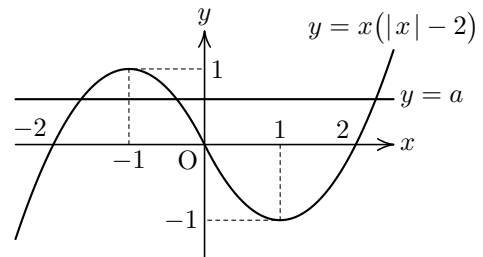
$$(a) \quad y = x(-x-2) \text{ すなわち } y = -(x+1)^2 + 1,$$

$$(b) \quad y = -x(x-2) \text{ すなわち } y = -(x-1)^2 + 1,$$

(c) $y = -x(-x-2)$ すなわち $y = (x+1)^2 - 1$ であるから, 該当するグラフは

$$(a) \text{ が } \boxed{\text{㊸}}, \quad (b) \text{ が } \boxed{\text{㊹}}, \quad (c) \text{ が } \boxed{\text{㊺}}.$$

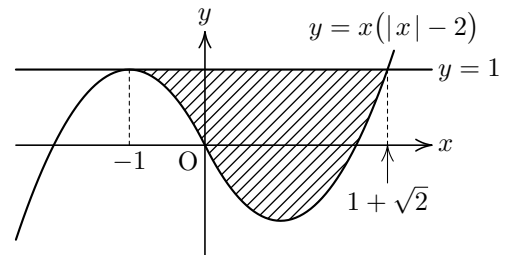
(2) 方程式 $x(|x-2) = a$ の実数解の個数は, $y = x(|x-2)$ のグラフと直線 $y = a$ の共有点の個数に一致する.



よって, その個数が 2 以上となる a の値の範囲は

$$\boxed{-1} \leq a \leq \boxed{1}.$$

(3) 求める面積 S は, 次図斜線部の面積である.



$x > 0$ で $x(|x-2) = 1$ となる x の値は,

$$x^2 - 2x - 1 = 0 \quad \text{かつ} \quad x > 0$$

より $x = 1 + \sqrt{2}$ であるから,

$$S = \int_{-1}^0 \{1 - x(-x-2)\} dx$$

$$+ \int_0^{1+\sqrt{2}} \{1 - x(x-2)\} dx$$

$$= \left[\frac{x^3}{3} + x^2 + x \right]_{-1}^0 + \left[-\frac{x^3}{3} + x^2 + x \right]_0^{1+\sqrt{2}}$$

$$= \boxed{\frac{6 + 4\sqrt{2}}{3}}.$$

II

[1] $0 < x \leq a$ のとき、マイバックを持参すると回答する確率は

$$\frac{\overset{\text{ア}}{x+2}}{\underset{\text{イ}}{a+2}},$$

レジ袋を購入すると回答する確率は

$$1 - \frac{x+2}{a+2} = \frac{\overset{\text{ウ}}{a-x}}{\underset{\text{エ}}{a+2}}.$$

[2] 1人の顧客について、マイバックを持参すると回答する確率が p であるから、

$$P = {}_{20}C_{10} p^{10} (1-p)^{10} = {}_{20}C_{10} \{p(1-p)\}^{10}.$$

$x = 4 (< a)$ のとき $p = \frac{6}{a+2}$ であるから、

$$p(1-p) = \frac{6}{a+2} \cdot \frac{a-4}{a+2} = \frac{\overset{\text{オ}}{6(a-4)}}{\underset{\text{カ}}{(a+2)^2}}.$$

ここで、

$$\begin{aligned} \frac{6(a-4)}{(a+2)^2} &= \frac{6(a-4)}{\{(a-4)+6\}^2} \\ &= \frac{6 \left(\overset{\text{キ}}{a-4} \right)}{(a-4)^2 + \overset{\text{ク}}{12}(a-4) + \overset{\text{ケ}}{36}} \\ &= \frac{6}{(a-4) + \frac{36}{a-4} + 12} \end{aligned}$$

であり、相加平均と相乗平均の大小関係より、

$$(a-4) + \frac{36}{a-4} \geq 2\sqrt{(a-4) \cdot \frac{36}{a-4}} = 12.$$

ここで、等号は

$$a-4 = \frac{36}{a-4} \quad \text{かつ} \quad a-4 > 0$$

より、

$$a-4 = 6 \quad \text{すなわち} \quad a = 10$$

のとき成立する。

よって、 $a = \overset{\text{コ}}{10}$ のとき $\frac{6(a-4)}{(a+2)^2}$ は最大値

$$\frac{6}{12+12} = \frac{\overset{\text{サ}}{1}}{\underset{\text{シ}}{4}}$$

をとり、このとき P も最大となる。

[3] $x = 2 (< a)$ のとき $p = \frac{4}{a+2}$ であるから、

$$p(1-p) = \frac{4}{a+2} \cdot \frac{a-2}{a+2} = \frac{\overset{\text{ソ}}{4(a-2)}}{\underset{\text{ス}}{(a+2)^2}}.$$

ここで、[2] と同様に

$$\begin{aligned} \frac{4(a-2)}{(a+2)^2} &= \frac{4(a-2)}{\{(a-2)+4\}^2} \\ &= \frac{4(a-2)}{(a-2)^2 + 8(a-2) + 16} \\ &= \frac{4}{(a-2) + \frac{16}{a-4} + 8} \end{aligned}$$

であり、相加平均と相乗平均の大小関係より、

$$(a-2) + \frac{16}{a-2} \geq 2\sqrt{(a-2) \cdot \frac{16}{a-2}} = 8.$$

ここで、等号は

$$a-2 = \frac{16}{a-2} \quad \text{かつ} \quad a-2 > 2$$

より、

$$a-2 = 4 \quad \text{すなわち} \quad a = 6$$

のとき成立する。

よって、 $a = \overset{\text{セ}}{6}$ のとき $\frac{4(a-2)}{(a+2)^2}$ は最大値

$$\frac{4}{8+8} = \frac{\overset{\text{ソ}}{1}}{\underset{\text{ス}}{4}}$$

をとり、このとき P も最大となる。

$a = 6$ のとき、マイバックを持参する人の割合を 75% 以上にするには、

$$\begin{aligned} x > 6 (= a) \quad \text{または} \\ 0 < x \leq 6 \quad \text{かつ} \quad \frac{x+2}{6+2} \geq \frac{75}{100} \end{aligned}$$

すなわち

$$x \geq \overset{\text{タ}}{4} \text{ 円}$$

にすればよい。

(注) $p(1-p) = -\left(p - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{4}$ であるから、 $\frac{\overset{\text{オ}}{1}}{\underset{\text{カ}}{4}}$

や $\frac{\overset{\text{シ}}{1}}{\underset{\text{ス}}{4}}$ の最大値が $\frac{1}{4}$ であることは、ある意味当

然。また、 $\overset{\text{コ}}{\square}$ 、 $\overset{\text{セ}}{\square}$ は $p = \frac{1}{2}$ となる a の値に相当。

III

[1] S の方程式は

$$(x-a)^2 + (y-1)^2 + (z-1)^2 = 5 \quad \dots \textcircled{1}$$

と変形できるから、 S の

中心 P は $(a, 1, 1)$ 、半径は $\sqrt{5}$ 。…(答)

[2] $\vec{AB} = t\vec{v}$ より、

$$\vec{OB} = \vec{OA} + \vec{AB} = \vec{OA} + t\vec{v}.$$

$$(x, y, z) = (2, 1, 1) + t(1, -2, -1)$$

$$= (2+t, 1-2t, 1-t). \quad \dots \textcircled{2}$$

よって、

$$x = 2+t, y = 1-2t, z = 1-t. \quad \dots \textcircled{3}$$

[3] S と l の共有点の座標は、 $\textcircled{1}$ と $\textcircled{2}$ をともに満たす実数の組 (x, y, z) である。

$\textcircled{2}$ を $\textcircled{1}$ に代入すると、

$$(2+t-a)^2 + (-2t)^2 + (-t)^2 = 5.$$

$$6t^2 - 2(a-2)t + \{(a-2)^2 - 5\} = 0. \quad \dots \textcircled{3}$$

S と l が異なる 2 点で交わる条件は、 t の 2 次方程式 $\textcircled{3}$ が異なる 2 つの実数解を持つこと、すなわち、 $\textcircled{3}$ の判別式が正であることである。

$$\begin{aligned} \frac{(\textcircled{3} \text{ の判別式})}{4} &= (a-2)^2 - 6\{(a-2)^2 - 5\} \\ &= 30 - 5(a-2)^2 \\ &= 5\{6 - (a-2)^2\} \end{aligned}$$

であるから、 a の満たすべき条件は

$$(a-2)^2 < 6$$

すなわち

$$2 - \sqrt{6} < a < 2 + \sqrt{6}. \quad \dots \textcircled{答}$$

[4] $PQ = PR = (S \text{ の半径}) = \sqrt{5}$ であるから、

$$\Delta PQR = \frac{1}{2}PQ \cdot PR \sin \angle QPR = \frac{5}{2} \sin \angle QPR.$$

一方、[3] のとき、 $\textcircled{3}$ の異なる 2 実解を α, β とおくと、

$$\vec{OQ} = \vec{OA} + \alpha\vec{v}, \quad \vec{OR} = \vec{OA} + \beta\vec{v}$$

と表せるから、

$$\vec{QR} = \vec{OR} - \vec{OQ} = (\beta - \alpha)\vec{v}.$$

$$QR = |\beta - \alpha| |\vec{v}|.$$

ここで、 α, β は $\textcircled{3}$ の解

$$t = \frac{(a-2) \pm \sqrt{5\{6 - (a-2)^2\}}}{6}$$

であるから、

$$|\beta - \alpha| = \frac{\sqrt{5\{6 - (a-2)^2\}}}{3}.$$

また、

$$|\vec{v}| = \sqrt{1^2 + (-2)^2 + (-1)^2} = \sqrt{6}.$$

よって、 $\angle QPR = 90^\circ$ すなわち $QR = \sqrt{2} \cdot \sqrt{5}$ となる条件は、

$$\frac{\sqrt{5\{6 - (a-2)^2\}}}{3} \cdot \sqrt{6} = \sqrt{2} \cdot \sqrt{5}.$$

$$6 - (a-2)^2 = 3.$$

$$a = 2 \pm \sqrt{3}.$$

よって、 $\angle QPR = 90^\circ$ となる a が存在するから、 ΔPQR の最大値は

$$\frac{5}{2} \sin 90^\circ = \frac{5}{2}. \quad \dots \textcircled{答}$$

[5] また、 ΔPQR が最大となる a の値は

$$a = 2 \pm \sqrt{3}. \quad \dots \textcircled{答}$$